

令和3年度やまがた木育推進委員会

日 時 令和3年10月26日（火）

午前10時から正午まで

場 所 山形県自治会館201会議室

次 第

1 開 会

2 あいさつ

3 議 事

協議事項

（1）令和元年度、令和2年度委員会での主な意見について

（2）やまがた木育の目的の整理と今後の進め方について

（3）やまがた木育のロードマップ（案）について

（4）その他

4 そ の 他

5 閉 会

<令和3年度やまがた木育推進委員会 議事録>

○開会

○環境エネルギー一部みどり自然課長あいさつ

○委員長あいさつ

○議事進行

(今村委員長)

よろしくお願いいたします。

それでは次第に従いまして、議事を進めて参ります。

(1) 令和元年度、令和2年度委員での主な意見について

(説明者：みどり自然課木育担当 主査)

(今村委員長)

各委員は、令和元年、2年度のご発言を思い出していただき、もしも足りないことやご質問やご意見がありましたら、お願いします。

(2) やまがた木育の目的の整理と今後の進め方について

(説明者：みどり自然課木育担当 主査)

(今村委員長)

事務局から説明いただいたことについて、ご意見、質問等ありましたらお願いしたいと思います。

(高橋栄美子委員)

パワーポイントがわかりやすく、進捗状況を確認でき、良かったと思いました。学校教育は、時代の変化に合わせて教育要領も次々変化し、新たなものが加わり、先生は本当に大変です。しかし、木育の中に重要な学びの機会が含まれているとすれば、朝の15分ほどの隙間時間など活用しながら、教育現場に積極的に取り入れて良いと思いました。人間の長い歴史の中で、森林との密接な関わりがあることを、子どもに伝えていかなければいけないと思います。ですから、このコロナ禍の中にある現代、「生きる」とはどういうことなのか、といった命に直結するような学習は大事ですから、積極的にアピールしていけたら良いと思いました。数年前に「もりはすごいなあ」の絵本作りに加えさせていただいたことが思い出されます。さゆり幼稚園でも、既製品ではない不揃いの積み木を子供に渡し、子供の自由な発想で物を作らせています。子供は、大人が考えられないような作品を作ります。そして、さゆ

り幼稚園の床は桐材を使っていますが、子供たちには、桐は子供が生まれたら植える文化があり、木の成長を眺めながら、親は我が子の成長を見守ってきたことを子供たちに話すと、よく聞いてくれます。それと同様に、人によって一生懸命育てられた木で積み木も出来ていることを説明します。幼稚園では、桐材の床の上で県産材の積み木で遊ぶ子供たちの姿があります。子供たちの心の中に確かに温かいものが伝わっていることを日々感じており、意味があることだと思っております。今日、木育について説明していただき、もう一度そのことを確信させていただきました。

(忠鉢春香委員)

資料が分かりやすいと思えました。目的をはっきりさせたことで、プログラムを構成しやすくなったと思います。自分たちの地域にある文化を目的としてプログラムを考えていくという方法は、今後、指導者の方に考えてもらうときにも、この形があれば、進めやすいのではと思います。

温海町森林組合では、今年初めて学校の先生を対象に体験プログラムを行いました。田川地区の学校の先生6名から、森林の伐採跡地での植林や下刈りなど、木を育てる体験をしていただきました。先生方は、忙しいためなかなか機会がないが、夏休みに活動をさせてもらい、学校の近くで、地域に関連付けた学習を出来る場があることが分かり良かった、という感想をいただきました。先生方も一生懸命、子供たちに教えるために、自分たちの時間を割いて勉強に来てくださいます。体験活動が木育を考えるきっかけになったのではと感じました。

(武田久昭委員)

2カ年の会議で出た課題をまとめていただき、「木育」は木づかい運動の一環であるという説明していただき、分かりやすいと思えました。学校の中で「木育」というものに、疑問をもたれる先生が多いです。最近では食育、木育、民育など、さまざまな分野から教育へのアプローチ方法があり、勉強しなければならないことが非常に多いです。木育は、学校や地域によっても温度差がありますが、木育を展開していく場所は、最上地方では郡部に行けば行くほどやりやすいのではと感じます。2年前まで勤務していた最上町立富沢小学校では、地域の木材を使って楽器を作って演奏する活動をしました。現在勤務している金山小学校は、金山スギが身近で、子供たちは非常に良く金山スギに触れています。認定こども園めぐたまでも、金山スギの積み木を使っております。今後は、木材に触れることが、やまがた木育＝人を作っていくことに繋がるように仕掛けていくことが課題であると思えます。また、学校のカリキュラムにおいて、1，2年生だと「生活科」があります。既存の教科書があるという難しさがありますが、その指導計画の中で、市町村の独自のものを使うことで木育の要素を入れていくという手段があるかもしれません。そして3年生以上では、「社会科」や、「総合的な学習の時間」もあります。金山小学校では、3年生が、金山町の特産物である落花生、

「ビーナッツ」の調理方法を考え、4年生は栽培を行い、5年生は金山スギについて、子供や保護者にアンケートを取るなど木材利用について考えています。そして、6年生はさらにそれを広げて、金山町のまちづくりを考えています。このように、教科の中で展開する方法はあるかと思います。金山小学校では総合的な学習の時間を核としてカリキュラムマネジメント（教科と教科の繋がりを考える）を行うことによって、教科の中のどこに重きを置くかを考えながら計画を立てていきます。その教科の中で、木育に重点を置くかどうかは、校長先生の考え次第だと思います。そうすると、最上では遊学の森や神室少年自然の家などの社会教育施設と連携をしながら、プログラムを作っていただくと良いと思います。また、忠鉢委員のご紹介にありました、森林組合で教員対象研修は良いことだと思いました。教員対象のものには、やはり意欲のある先生が来ます。そういう教員が木育の底辺を支える存在になっていくと思います。

（今村委員長）

事務局から逆に、委員への質問等ございますか。

（みどり自然課木育担当 主査）

幼稚園、小学校、中学校、もしくは社会施設等を通じた連携をしながら、木育を展開したいと思っておりますが、何か糸口やヒントがあれば教えていただきたいと思います。

（高橋栄美子委員）

私はこの委員会に参加させていただくようになって、協働による教育が大切だと再認識しております。幼児教育の分野では、狭くならず、様々な分野から学ぶことが大事です。それぞれの教育・保育施設の管理者の意識の問題だと思いますから、私たちのように、こうした木育について意見交換する場に参加する機会を、色々な組織に呼びかけて、参加者を募っていくことは大切であると思います。

（武田久昭委員）

各地域への普及を図るのであれば、各総合支庁教育事務所の指導課で担当している、教諭の初任者研修、2年研修、中堅者研修があります。例えば初任者研修ですと、社会教育施設で行われますが、そこに木育プログラムを入れていただくなど、新たに作るより既存にある研修等に入れてもらうことはいかがでしょうか。若手の先生はいろいろなことを学び、吸収していきますので、若いうちに色々な分野に触れると良いかと思います。私も、社会教育関係に勤務していた際、「上から同じようなものが降りてくる」と、学校の先生から指摘されましたので、行政の横の繋がりは大事です。そして、依頼してみても、「○」のところもあれば、「×」のところもあると思います。

もしも学校に直接依頼に行くのであれば、その学校での木育展開の具体例を紹介すると、そ

この校長先生の考えを膨らませると思います。「やってください」というと、何をしたら良いか分からないと思うので、具体的な形で提案したら良いと思います。

(今村委員長)

実際に普及していく方法というのは、行政の方からすると非常に難しい問題だと思えます。木育だけではなく、環境教育も、どうやってボランティア団体や学校などと繋がっていくか、非常に難しいものです。年10回行って3回手応えがあるなど、打率3割程度のつもりで、その中の1回1回を大事にしていくことです。極端に言いますが、1つの学校等を、えこひいきして目立たせていくことも方法の一つです。他の学校もやりたい気持ちにさせるように、やる気を煽っていただいた方が良いと思います。木育だけではなく、環境に関しては、子供の成長に対して良い評価になると、先生たちも非常にやる気になります。一方で、指導者としての評価が、「なんかやったらしいね。」程度で終わると、先生側にモチベーションが生まれません。そういう意味では、しっかりした評価が必要であり、そのためには目標設定があり、目標＝評価基準になり、子供たちが半年後に、自主的に協力して、積極的な活動ができるようになったとか、子供たちが毎日明るいとか、そういう成果を表に出していくと良いと思います。学校でも目標として掲げれば教育計画を立てて取り組みやすく、気長に、半年～1年、という目安で展開できると良いと思います。

その他として、最近では、ぼっちキャンプなど流行りがありますが、幼稚園や小学校の先生に、少年自然の家でのキャンプなど、日頃のお仕事の癒しのつもりで参加を呼びかけていただいて、先生方にはレクリエーションとしてアウトドアを楽しみながら、その中に、社会、理科の授業でのネタにしてみたくなるような森林での遊びをたくさん経験していただく、というのはどうでしょうか。経験的に、環境に関しては人を集めるのは大変ですが、最初に人が少なかったとしても、それをずっと地味に続けることが重要です。あとは、やはり木育も含め、子供の頃からの自然体験が重要だと思います。我々は子供時代に自然の中で遊んだ体験がありますが、今はそれが少なかったりするので、高橋委員のように、幼児への活動に力を入れていただくと、小学校からの授業にそのまま活かされる。小学生まで繋がった長期的な見通しで、幼児に投資をしていくことも必要であると思います。北欧のプログラムを見ますと、幼児期から日常的に森に入り、お菓子やご飯を食べたり、遊んだりしています。さらに、森の中で拾った枝の数を数えるなど、幼児期に算数の導入をやっています。発達段階に応じて、幼児でもできる範囲の学習を森の中で行い、その後小学校教育への連携になっていく。幼稚園の先生と相談し、そういうプログラムもあると良いと思います。小学校での学習には、幼児体験が大きく影響を与えます。中学校、高校でも必要はあるかと思いますが、小学校までが効果が大きいと思います。

他には、県内の産業高校、農業高校とタイアップできることを探すのも良いと思います。おそらく農業高校ですと、これまで何年も積み上げてきた樹木、草本などを課題研究として取り組まれている実績があると思います。そういうところと連携したことをアピールし、そ

の結果を評価できれば良いと思います。

(高見佳澄委員)

資料を見せていただいて、素晴らしいと思います。課題としては、木育の大切さを如何に感じてもらえるか、ということだと思います。例えば「食育」は、子供の健康のために何を食べさせるか、日々お母さんたちの頭を悩ませていることでもあり、一般に浸透していますが、やはり、木育は鬼気迫る感じがないので、どうしても、言葉自体が浸透していないように思います。ただ、プラスチックより木のおもちゃを使っているというお母さんの中にはおり、言葉として浸透していなくても、森とともに生きることとか、木を活かしていくことが大事だということが、意識下にあるだけでもいいと思います。やはり、この資料を見せていただくと、子供は、幼稚園、小学校、子育て支援施設などで触れる機会があっても、親がそれを学ぶ場所はなかなかありません。一部の意識が高い方は、情報を拾って現場に足を運ばれると思いますが、世間一般の方にも浸透させようとするならば、どうしたら良いのか考えました。例えば、芋煮で山形県の地域産の薪を使う、というのを大々的に呼びかけて、使ってみようとなった際は、どこで手に入れば良いのか、そうした情報をどういう風に出していくのか、考えないといけません。やはり芋煮というと季節限定されてしまうので、通年を通してできるものがあると良いと思います。「木育」と広く言われると、どこから手を付けてよいのか難しいものですが、代表的で分かりやすいものが1つあれば、段階を踏んで親世代にも浸透させられるかもしれないと思いました。地域産のもの入手方法にも関連がありますが、森林に関する仕事に関する情報も必要であると感じます。森林関係の仕事に就いた場合、自分の子供がそれで生計を立てていけるのかというのは、親としては心配なところですが、そういう部分も詳しく分かると、親としては嬉しいと思います。

また、県民の森は、遠くて足が向かない方も多いいと思います。私が住む山寺は山だらけなので、子供を連れて行ってみようという気には正直なりません。そこで、山寺地区では、山寺文化祭というものがあり、必ず子供が全員参加し、送り迎えに必ず親も来るので、そこでの木工体験は、親子ともども、浸透させる場としては良いと思います。そういうコーナーを作っただけだと、子供たちも親も学べると想像しました。

(今村委員長)

それでは時間もありますので、議事を進めたいと思います。

(3) やまがた木育のロードマップ(案)について

(説明者：みどり自然課木育担当 主査)

(今村委員長)

事務局からご提案がありましたが、皆さんから、何かご意見、ご質問等あればいただきたい

いと思います。

(忠鉢春香委員)

ロードマップの作成はとても良いことだと思います。長いスパンで課題に対して進めていく方向が見えるようになりました。県民の森の木育拠点化についても、これが充実していくことで、木に触れる機会、山に入る機会が増えることを期待しています。また、各種イベントにブースを設置してPRということですが、様々な場所で木育に触れられる状況になっていくことを期待します。やはり、まだ「木育」という言葉自体が身近ではありません。木を使うこと、木を育てることの大切さが県民に知れ渡り、この取り組みを大事に、続けて欲しいと思います。

(武田久昭委員)

私も長いスパンでロードマップができたというのは、まさに「見える化」であると思ったところです。おそらく、軌道修正は要所で行っていくのだろうと思いましたが、これができたことがすごいなと思いました。一つお願いですが、やはり、モデルとなるやまがた木育プログラムは、是非、作成して欲しいと思います。目標は4地域で1個とのことですので、その地域の実情に合ったプログラムの作成を、是非お願いいたします。

発信のところですが、平成30年度に「森林やまがた」という冊子で、やまがた木育の推進に関する1ページがありますが、非常に見やすいです。ただ、学校の実情としましては、先生方の目に触れる機会がなかなかありません。そこで、予算があれば、この1ページをワンプーパーにして、学校当たり少なくとも3枚ぐらいあると校長、教頭、教務に行きわたるので、PRとしても、目に付くのではないかと思います。また、活動状況等について、1～3年単位でワンプーパー出していただくと良いかと思います。学校によっては、GIGAスクール構想もあり、1人一台パソコンで見れる場合もあるかもしれませんが、まだペーパーも都合が良いかと思ったところです。

(高見佳澄委員)

例えば山形市では、乳児3ヶ月検診で絵本プレゼントがありますが、検診に来たお母さんに意識付けするには、検診のタイミングで、「やまがた木育です」という説明書きを付けた木製スプーンなどをプレゼントすると、親の意識も向くかもしれません。木は良いんだよ、ということ、小さいお子さんを持つ方に意識づけしていくのは良いと思ったところです。

(今村委員長)

ありがとうございます。とてもいい案だと思います。ぜひ、先ほどのパンフレットも同様ですが、電子媒体も合わせて配信すると、子供が持っているタブレットで授業中に見られるというようなメリットもあるかと思います。どちらかというと、タブレットを使って、IC

T教育に役立つ点などのメリットも同時に伝えたら良いかと思います。これを配信すれば、学校でICT教育をやっている実績の一つになります、といった具合です。昨今は、どの学校もICT教育をやることに必死です。今のところ現場は、箱物は整備したのに、WiFi環境が整わないなど、そういう状況になっているところもありますが、使う場所の確保に先生は頭を悩ましていますから、タイムリーで良いと思います。

また、高見委員からは、親からの立場でのお話をいただきました。子供が生まれたお母さんに対してのプレゼントについても、子育て支援という方向性で予算がもらえれば良いと思います。そのためには、緑環境税の予算を、もっとソフト事業に投資していただきたいです。現実問題として、何か事業を行う場合、予算は必要です。積み木や絵本等を増刷し、幼稚園に配っていただきたいと思います。そのうちの一部は必ず使っていただけるので、多めに配布し、木育に参加していただくような努力をしていただきたいと思います。せっかく作ったロードマップは、考え方としては良いとは思いますが、どうしても現実問題としては予算が必要になっていくので、ぜひお願いしたいです。

あとは、このロードマップは、できれば、2、3年程度、1回ずつ、中締め=評価をしていただいて、その評価の結果を、こうした会議できちんと示してご意見をいただくということが必要であると思います。それは環境審議会の方にも上げていただいて、これだけ成果が出てきつつあるということで、評価をうまく利用できれば良いかと思います。恐らく、評価する際には、〇件中〇件ができました、もしくは、予定した何%が現在進行中、というように、可能なところは言うていただく非常に良いかと思います。そうしますと、より現実的に、このロードマップが使えるかどうかにかかってくると思います。

(高橋栄美子委員)

ロードマップによる「見える化」は理解しやすいです。自然環境がこれだけ変わってきて、危機感を持たない人はいないと思います。そのうえで、森林の力は大切だということは、大勢の人が気づいていると思います。ですから、ロードマップがあり、今後の計画があり、人材育成として、木育志望者の普及講座など、木育に触れる機会があるということは、関心を持つチャンスになり、それが広まっていく機会を得られるのではないかと思います。それから、高見委員のスプーンを作るという案は良いと思いますが、0歳の乳児に何が適しているのかは、発達段階を考慮し、適切な玩具を選択しないといけません。経験的に、皿が良いかもしれません。赤ちゃんは、お皿をかじったり、コンコンと音が出るのでよく遊びます。そうした玩具を開発するためのチームを作っても良いかもしれません。昔の木地玩具は、ただ袋に木材を入れて、カチカチと木と木がぶつかる音がするというシンプルなものですが、金属音には無い、何とも言えない良い音を赤ちゃんは楽しめます。木の香りなども同様ですが、乳児の発達にとっても大事な要素が含まれています。開発チームで話し合えば、良い案が出てくるのではと思います。

(みどり県民活動推進主幹)

このロードマップは、やまがた木育を推進していくため、令和10年度までに行う条件整備の計画になっています。これについては、おおむね認めていただけるのかなというような印象です。事務局の立場から、皆さんにご意見をいただきたいことがございます。やまがた木育の目的は人づくりであります。その成果はどのような形でお示しできるのでしょうか。学校教育も、学問以外の人づくりという点で目標に掲げられているかと思いますが、何かしらの指標を示すなど、手法はあるのでしょうか。木育がどの程度進んだのかという客観的な成果の表し方について、ご意見をよろしくお願いします。

(今村委員長)

木育プログラムの参加者数や、あるいは学校の中でどれだけ木育に授業で取り組んだか、先生方の関心を高めたか、といった、何らかの調査をしなければいけないと思います。ただ、その評価の中身で一番分かりやすいのは数値での表現になるかだと思います。人づくりの面での評価は、子供たちの行動変容に寄与したかどうかという、取り組んだ先生の実感になると思います。小学校の6年間で、木育が良いきっかけとなって成長した子がいたかどうか、その成長度合いを、実践した先生に聞いていただくしかないと思います。もしくは、木育プログラムに参加した方には、その後の行動変容につながったかどうか直接伺うしかないと思います。我々のような研究者は、そういうところも数値として評価するために、質問自体をかなり練り、かつ簡単に答えられるアンケートを作成します。最近、ネットアンケートなど、よく流通しておりますが、何かしらで質問をしていただくことです。先生から見ると、子供たちの自立に役立ったかどうか、または、山形県環境教育指針の「つきたい力」から、公正・不公正を見分けることができるようになるなど、非常に難しい内面に關わる部分で、子供たちの成長に役に立ったと考えられるかどうか。絶対的な数字は出せませんが、そういう点で評価できると思います。この内面に關わる場所に木育が影響し、子供たちが態度として見えるような成長をすると、それが学業、学習態度にはね返ってきます。環境教育全体が盛んに進みにくいのは、こうした内面的なものの評価が難しいというのが原因の一つです。学期の終わりに行ったテストの点数等、知的なレベルではなくて、長期的に見て内面が成長したという点の評価が足りないと思います。そうした評価が聞ければ、それを資料として良いと思います。本来は、ここで木育を経験した小学生が、20、30年後に、山形県に対してどういう意見を持ち、どういうライフスタイルで生活しているか、ということになりますから、表向きの結果を評価するのは30年後ということになります。しかし、その芽が出たかどうかは、やはり指導者から意見を聞いて評価するしかない。これは、教育委員会とよくよく相談されてだと思えます。教育的な指標での評価が、人材育成のためには必要だと思います。数値的なことは目に見えるのですが、それ以外の部分をどう評価するかだと思いますし、そこが本来は一番大事な、育てるべき部分だと思います。将来、山形の森林環境を良くしていける子供たちの気持ちを育てることができた、という成果を示せたら、私は正解だと

思います。

(高橋栄美子委員)

今村先生のお話に強く共感します。非認知能力は、生活や環境の中で学ぶものです。テストの点数の良さは、それはそれで価値はありますが、協調性やコミュニケーション能力などの必要性は世界中で言われております。ですから、遊びの中にこそある学びの物語は大切です。ただ、それを社会に理解してもらうにはどうするかは、幼児教育の課題の一つであり、成果示すことは難しい部分です。しかし、それを表に出して評価を受け、再び投資してもらえるようにすることで、国の将来は変わると思います。例えば木育を推進すれば、子供たちの表情が変わっていくと思いますし、実際に変わってきています。同様に、先生方の表情も変わってきます。子供たちの仲間意識も変わってきます。さらにそれが作品や歌などの表現になっていきます。それが波及していき、学校や園や地域の環境が変わっていくのではないかと思います。小さい行動なのかもしれませんが、木育の波及効果は大きいものであると改めて感じます。そこで、乳幼児に関しては、目に見える結果だけではなく、そのプロセスで子供たちが楽しそうな表情で夢中になって取り組んだこと、それに対して、教育者・保育者たちが、木の教材を使ったことで、新たな気づきがあった等、何かをまとめ、アウトプットすることも大事であると思います。研修会等でポスター発表もよく開催されますが、すでに木育を取り入れている教育保育施設に、活動をまとめて発表すれば、みんなの意識が高まっていくと思います。

(武田久昭委員)

学校教育においては校長先生の考え次第ですが、私は、子供は義務教育の9年間で育てるものと考えており、小学校6年間だけとは思っておりません。なので、1年生はこのぐらい、2年生ではこのぐらい、という成長の到達目標の目安を持っています。やまがた木育については事務局の説明の中に「行動を起こすことができる人づくり」という目的がありました。具体的な目安については、プログラムの中にターゲットとなる「つきたい力」が多分あると思うので、受講した子供にその力が身についたかどうかを指標に、引率の教員、保護者も含め、聞き取りやアンケート調査等行うのが一番かと思います。あとは、30年後に、金山小学校の卒業生が金山スギを扱う関連の職業に就いていた等は、成果であると思います。ただし、私は30年後、金山町に居ないと思うので、その成果が見えないのか残念です。

(今村委員長)

武田校長先生は学校で一生懸命取り組まれているので、子供たちが興味を持って主体的に活動し始めると、学級、学年の雰囲気が変わってくることをご存じかと思います。雰囲気が変わると、先生方は授業がしやすくなります。子供たちが自主的に質問してきますので、

学年にとどまらず、その学校自体の雰囲気が変わっていきます。それは、数字で直接示しにくいと思いますが、そこはインタビュー等行い、少し違った雰囲気になってきたということがわかれば良いかと思います。環境教育や木育に取り組むと、子供が良くなることで学校が良くなり、学校が楽しくなることを子供たちに知ってほしいですし、地域がそれを応援することで、地域も良くなるという、そういう視点になれる要素が非常に多いと思います。評価をするのは非常に難しいものですが、「つけたい力」を1つの目安として、これで目標を先生たちに立てていただき、1つのやまがた木育プログラムは、「つけたい力」のどの項目を目安にして実施した。それに対して子供がどのぐらい伸びた、という風に整理し、この目標はイコール評価の資料になるので、データを地味に集めていくことが大事であると思います。そういう子供さんが、家に帰ったら、お母さんと楽しく会話ができるようになることも大変良いことなので、家庭への波及効果も望んでいるところです。それではこのロードマップに関しては、令和4年から実質的に動き出すこととなりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

(4) その他について

(説明者：みどり自然課木育担当 主査)

(今村委員長)

10月23日から、環境展が開催されておりますが、そこでは木育はどんな形でアピールされておりますでしょうか。

(みどり自然課 課長補佐)

まだプログラムができていないので、環境展では特に示しておりません。

(今村委員長)

できれば環境展でも、ロードマップを示し、県民の方にご意見と募るという機会もあれば良いかと思います。

それでは議事に関しては終了いたします。

本日は質問というより、皆様からのご要望、ご意見がかなり多かったと思います。さらに、このロードマップをきめ細やかに進めていただければと思いますので、事務局の方では、整理検討の方よろしくお願ひいたします。木を植えてから、成長して利用できるようになるまで半世紀、少なくとも30年程度はかかります。それと同様に、子供への木育の成果が見えるのは、子供たちが大人になり、さらに自分の子供ができた頃ですから、長いスパンで考える必要があります。ぜひ、木育も環境教育の一部として長期的に頑張っほしいと思います。その分、短期的に1つ1つ、やれることを重ね、将来に期待するしかありません。木育の場

合は、成果が直接的でないことが非常に難しい部分であると感じます。ゴミ問題なら、拾えば成果が見えますが、木育は、二次的三次的な影響を及ぼすものが多いという特徴があります。それが将来どんな影響を与えるのかというところも、30年後に起こりそうな予測の元に評価することも出てくるかと思しますので、この点も検討いただければと思います。このロードマップに従って、長い時間取り組んでいただき、30年後は私もこの世にいないと思いますが、未来を楽しみにしながら生きていたいと思います。また、最後はやっぱり、木育は楽しい、と感じることが大切だと思います。やらなければならない教育はすごく苦しいので、やってみたら楽しかった、成果は今すぐにあるかどうかは分からないけれども、そのうち良くなるはずだ、将来のために自分は頑張れた、そういう前向きな気持ちで、指導者も、子供も、みんなが持てるような木育を目指したいと思います。委員全員の意見を含んでいるか分かりませんが、私の強い意見もあります。ぜひ、県の方でも、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは以上で、本日の議事はすべて終了いたしました。本日もご出席いただいた委員の皆様、色々なご発言をいただきまして、ご協力ありがとうございました。